

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

小学5年生の「ぼく」(野崎翔太)は「ファルコンズ」という少年野球チームで野球にうちこんでいたが、転校をきっかけに野球をやめ、今は、引越した先で偶然出会った将棋に夢中になっている。「朝霞こども将棋教室」に通いながら実力をつけていった「ぼく」だが、ある日、同じ将棋教室に通う、自分より三つも年下の山沢君に負けてしまう。「ぼく」は、次に山沢君と対局するときはなんとしても勝りたいと研究を重ねていた。

アパートの部屋で、ひとりで将棋をしていると、山沢君の顔が頭に浮かんだ。小学2年生なのに厚いレンズのメガネをかけて、肌の色は白く、手足も細い。きつと、サッカーも野球も、あまりうまくはないだろう。ぼくが山沢君について知っているのは、その程度だった。どこの小学校なのかや、何歳で将棋を始めたのかも知らない。山沢君だって、ぼくのこととは名前と学年しか知らないはずだ。

①(同じ将棋教室に通っていても、ぼくたちはおたがいのことをほとんど知らずに対局しているんだ。)

そのことに、ぼくは初めて気づいた。ファルコンズのメンバーは全員同じ小学校だったし、どこに住んでいるのかも、きょうだいが何人いるのかも知っていた。食べものの好き嫌いや、勉強がどのくらいできるのかも知っていた。土まみれになって練習し、試合に勝てばみんな喜び、負けてはみんな悔しがった。

でも、一対一で戦う将棋では、勝っても、喜び合うチームメイトがない。チームメイト同士で励まし合うこともない。将棋では、自分以外は全員が敵なのだ。

②野球と将棋のちがいを考えているうちに、ぼくはさみしくなってきた。

(でも、山沢君がどのくらい強いかは、いやというほど知ってるぜ。)

ぼくは山沢君との一局をくりかえし並べていた。おそらく、ぼくの指し手は全て読み筋にあったにちがいない。つまり、多少手強くはあっても、負ける気はしなかったはずだ。

(見てろよ、山沢。今度は、おまえが泣く番だ。)

ぼくは気合いを入れたが、ますますさみしくなってきた。

(自分以外は、全員が敵か。)

頭のなかでつぶやくと、涙がこぼれそうになった。

③(将棋は、ある意味、野球よりきついよな。)

ぼくは初めて将棋が怖くなった。

前回の将棋教室から2週間がたち、ぼくは自転車で公民館にむかった。母は、午後3時前に来てくれることになっていた。介護施設での昼食の支度と片付けがあるため、Aコースが始まる午後1時に来るのはどうしても無理だからだ。そのことは、母の携帯電話からのメールで、有賀先生に伝えていた。

この2週間、ぼくはひたすら横歩取りを研究した。できれば、今日は山沢君とは対戦せずに、別の相手に研究の成果をぶつけてみたい。

ぼくは父と母にも山沢君のことを話していた。二人とも、大熊君と同じく、ぼくが負けた相手が小学2年生だということに驚いていた。

「何回負けたって、いいんだぞ。おとうさんは、翔太が夢中になれるものを見つけたことがうれしいんだから。」

「おかあさん、将棋は野球よりも、ずっと大変だと思うの。だって、野球なら、味方の活躍で勝つこともあるけど、将棋には味方がいないじゃない。」

二人とも、駒の動かしがたすらわかっていないのだが、それなりに的確なアドバイスなのがおもしろかった。

公民館に着いて、こども将棋教室がおこなわれる103号室に入ると、ぼくは挨拶をした。

「こんにちは。お願いします。」

気合いが入りすぎて、いつもより大きな声が出た。

「おっ、いい挨拶だね。みんなも、野崎君みたいにしっかり挨拶をしよう。」

有賀先生が言ったのに、返事をした生徒はひとりもいなかった。先生も、困ったように頭をかいている。ファルコンズだったら、罰として全員でベースランニングをさせられるところだ。

④(将棋一辺倒じゃなくて、野球もやってよかったよな。)

ぼくは航太君のおとうさんと田坂監督に胸のうちで感謝した。

朝霞こども将棋教室では、最初の30分はクラス別に講義がおこなわれる。ぼくは初段になったので、今日から山沢君たちと同じ、一番上のクラスだ。ところが、有段者で来ているのはぼくと山沢君だけだった。

「そうなんだ。みんな、かぜをひいたり、法事だったりだね。」

講義のあとは、ぼくと山沢君が対戦し、2局目は有賀先生がぼくたち二人を相手に二面指しをするという。前にも、先生が3人の生徒と同時に対局するところを見たが、手を読む速さに驚いた。プロが本気になったらどれほど強いのか、ぼくは想像もつかなかった。

「前回と同じ対局になってしまいうけど、それでもいいかな？ 先手は野崎君で。」

⑤「はい。」

ぼくは自分を奮い立たせるように答えたが、山沢君はつまらなそうだった。

⑥(よし。□にも見せてやる。)

ぼくは椅子にすわり、盤に駒を並べていった。

「おねがいます。」

二人が同時に礼をした。

(中略)

二人の勝負は、対戦開始から激しい展開となった。どちらにも決め手がないまま、数十分を超える長期戦となる。

※「そのまま、最後まで指しなさい。」

有賀先生が言って、そうこなくちゃと、ぼくは気合いが入った。かなり疲れていたが、絶対に負けるわけにはいかない。山沢君だって、そう思っているはずだ。

(勝ちをあせるな。相手玉を詰ますことよりも、自玉が詰まされないようにすることを第一に考えろ)

細心の注意を払って指していくうちに、形勢がぼくに傾いてきた。ただし、頭が疲れすぎていて、目がチカチカする。指がふるえて、駒をまっすぐにおけない。

「残念だけど、今日はここまでにしよう。」

ぼくに手番がまわってきたところで、有賀先生が対局時計を止めた。

「もうすぐ3時だからね。」

そう言われて壁の時計を見ると、短針は「3」を指し、長針が「12」にかかっている。40分どころか、1時間半も対局していたのだ。

ぼくは盤面に視線を戻した。ぼくの玉はすでに相手陣に入っていて、詰ませられることはない。山沢君も入玉をねらっているが、10手あれば詰ませられそうな気がする。ただし手順がはつきり見えているわけではない。玉をねらっているが、10手あれば詰ませられそうな気がする。ただし手順がはつきり見えているわけではない。

「すごい勝負だったね。ぼくが将棋教室を始めてから一番の熱戦だった。」

⑧ プロ五段の有賀先生から最高の賛辞をもらったが、ぼくは詰み筋を懸命に探し続けた。

※馬引きからの7手詰めだよ。」

⑨ 山沢君が悔しそうに言っ、ぼくの馬を動かした。

「えっ？」

まさか山沢君が話しかけてくるとは思わなかったので、ぼくはうまく返事ができなかった。

「こうして、こうなっ。」

※詰め将棋をするように、山沢君が盤上の駒を動かしていく。

「ほら、これで詰みだよ。」

(なるほど、そのとおりだ。)

⑩ 頭のなかで答えながら、ぼくはあらためてメガネをかけた小学2年生の実力に感心していた。

「プロ同士の対局では、時間切れ引き分けなんてない。それは研修会でも、奨励会でも同じで、将棋の対局はかならず決着がつく。でも、ここは、小中学生むけのことも将棋教室だからね。今日の野崎君と山沢君の対局は引き分けとします。」

有賀先生のことばに、ぼくはうなずいた。

「さあ、二人とも礼をして。」

「ありがとうございます。」

山沢君とぼくは同時に頭をさげた。そして顔をあげたとき、山沢君のうしろにぼくの両親が立っていた。

「えっ、あれっ。ああ、そうか。」

ぼくは母が3時前に来る約束になっていたことを思い出したが、まさか父まで来てくれるとは思ってもみなかった。もうBコースの生徒たちが部屋に入ってきていたので、ぼくは急いで駒を箱にしまった。

「みなさん、ちょっと注目。これから野崎君に認定書を交付します。」

ふつうは教室が始まる時にするのだが、有賀先生はぼくの両親に合わせてくれたのだ。

「野崎翔太殿。あなたを、朝霞こども将棋教室初段に認定します。」

みんなの前で賞状をもらうなんて、生まれて初めてだ。そのあと有賀先生の奥さんが賞状を持ったぼくと有賀先生のツーショット写真を撮ってくれた。両親が入った4人での写真も撮ってくれた。

「野崎さん、ちょっといいですか。翔太君も。」

有賀先生に手招きされて、ぼくと両親は廊下に出た。

「もう少し、むこうで話しましょうか。」

どんな用件なのかと心配になりながら、ぼくは先生についていった。

「翔太君ですが、成長のスピードが著しいし、とてもまじめです。今日の一局も、じつにすばらしかった。」

有賀先生によると、山沢君は小学生低学年の部で埼玉県のベスト4に入るほどの実力者なのだという。来年には研修会に入り、奨励会試験の合格、さらにはプロの棋士になることを目標にしているとのことだった。

⑪「小学5年生の5月でアマチュア初段というのは、正直に言えば、プロを目ざすには遅すぎます。しかし野崎君には伸びしろが相当あると思いますので、親御さんのほうでも、これまで以上に応援してあげてください。」

そう言うと、有賀先生は足早に廊下を戻っていった。

まさか、ここまで認めてもらっているとは思わなかったので、ぼくは呆然としていた。将棋界のことをなにも知らない父と母はキツネにままれたような顔をしている。二人とも、すぐに仕事に戻らなければならぬというので、詳しいことは今晩話すことにした。

103号室に戻り、カバンを持って出入り口にむかうと、山沢君が立っていた。ぼくより20センチは小さくて、腕も脚もまるきり細いのに、負けん気の強そうな顔でこっちを見ている。

「つぎの対局は負けないよ。絶対に勝ってやる。」

「うん、また指そう。そして、一緒に強くなろうよ。」

ぼくが言うと、山沢君がメガネの奥の目をつりあげた。

「なに言ってるんだよ。将棋では、自分以外はみんな敵なんだ。」

小学2年生らしいムキになった態度がおかしかったし、「自分以外はみんな敵だ。」と、ぼくだって思っていた。

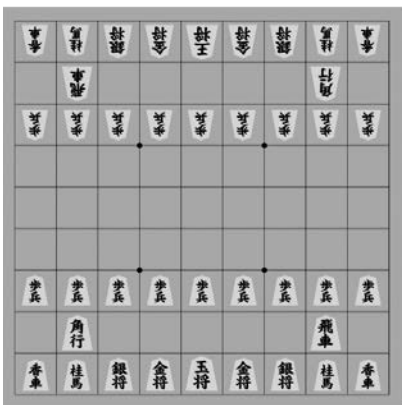
「たしかに対局中は敵だけど、盤を離れたら、同じ将棋教室に通うライバルでいいんじゃないかな。ぼくは初段になったばかりだから、三段になろうとしているきみをライバルっていうのは、おこがましいけど。」

⑭ぼくの心はずんでいた。個人競技である将棋にチームメイトはいないが、ライバルはきつといくらでもあらわれる。勝ったり負けたりをくりかえしながら、一緒に強くなっていけばいい。

(佐川光晴「初めてのライバル」『駒音高く』より)

※(注) 将棋

盤という台の上に置かれた駒を使い、一対一で対戦するゲーム。駒を交互に動かして、先に相手の「王将(玉)」という駒を動けない状態にした方が勝ちとなる。



将棋の盤と駒

対局———将棋の対戦のこと。

ぼくの指し手は全て読み筋にあった———ぼくがどう駒を動かすかを山沢君は全て予測していた。

有賀先生———「ぼく」の将棋の先生。「朝霞こども将棋教室」を開いている。

横歩取り———将棋の戦術の一つ。

大熊君———「ぼく」のクラスメイト。

航太君のおとうさんと田坂監督———少年野球チーム「ファルコンズ」の指導者。

初段

腕前うでまえを示す位。初段から二段、三段と順に高くなる。

二面指し

二人同時に相手しりょうぎにして将棋を指すこと。

そのまま、最後まで指しなさい

そのまま、最後まで対戦を続けなさい。

相手玉を詰ますことよりも、自玉

が詰まされないようにすることを

勝つことよりも、負けないようにすることを。

詰ませられることはない

負けることはない。

入玉にゅうぎょく

自分の「王将おうしょうぎょく」を相手の陣地じんちに入れて負けにくくすること。

詰ませられそうな気がする

勝てそうな気がする。

詰み筋

相手の「王将玉」を追い詰めるまでの手順。

馬引きうまひき

馬こまという駒を動かすこと。

詰め将棋をするように

勝つまでの手順てくれんを確認するように。

研修会でも、奨励会しょうれいかいでも

研修会・奨励会は、将棋のプロを目ざす人たちが入る会。

棋士きし

将棋を職業とする人。

問一 —— 線①「そのことに、ぼくは初めて気づいた。」とありますが、「ぼく」はどんなことに気づいたのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 山沢君やまざわとちがいが、「ぼく」はサッカーも野球もうまいが、将棋が大好きという点だけは共通しているということ。

イ 山沢君は「ぼく」より年下だが、将棋を始めたのも将棋教室に入ったのも自分よりずっと早かったということ。

ウ 「ぼく」はひとりで将棋を研究するしかないが、山沢君は周囲に将棋を教えてくれる人が大勢いるということ。

エ 「ぼく」と山沢君は同じ将棋教室の生徒だが、おたがいのことをほとんど知らないで対戦していたということ。

問二 —— 線②「野球と将棋のちがいを考えているうちに、ぼくはさみしくなってきました。」とありますが、なぜ「ぼく」は「さみしくなっ」たのですか。それを説明した次の文の□ 1・2にあてはまる言葉を、それぞれ文中の言葉を使って答えなさい。

野球では

1

が、将棋では

2

から。

問三 —— 線③「ぼくは初めて将棋が怖くなった。」とありますが、なぜ「ぼく」は「将棋が怖くなった」のですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 山沢君との対局をくりかえし研究すれば研究するほど、山沢君がどれほど強い敵なのがわかっ
てきたから。

イ「ぼく」が山沢君に勝ってしまうと、将棋に一生懸命な山沢君は傷ついて泣いてしまうだろうと
考えたから。

ウ 将棋の対局ではだれも助けてくれず、自分ひとりだけで戦わなければならないことを身にしみて
感じたから。

エ 山沢君に負けてしまったときのことを思い出して、次の対局でもふたたび負けるのではないかと
思ったから。

問四 —— 線④「将棋一辺倒じゃなくて、野球もやってよかったよな。」とありますが、なぜ「ぼく」は「野
球もやってよかった」と思ったのですか。解答らん「から。」につながるように、文中の言葉を使っ
て十字以上二十字以内で答えなさい。

問五 —— 線⑤「ぼくは自分を奮い立たせるように答えた」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちとし
て最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア この2週間、ひたすら山沢君に勝つための方法を研究してきたので、とうとう山沢君と戦って勝
つことができる、と期待に胸をふくらませている気持ち。

イ「ぼく」の方が体をきたえているはずなので、もし将棋の勝負に負けたら野球の勝負で山沢君に
挑戦し、なんとしても勝ってやろうと決意を新たにしている気持ち。

ウ 研究の成果を試す前であったが、山沢君と対戦することになったからには、前回以上の対局をし
ようと自分自身に気合いを入れる気持ち。

エ 準備不足の状態で山沢君と対戦することになってしまい、こわくて足がふるえ出してしまったの
で、一刻も早くふるえを止めようとする気持ち。

問六 —— 線⑥「にももの見せてやる。」とありますが、文中のに体の部分を表す漢字一字を入
れ、慣用句を完成させなさい。

問七 —— 線⑦「形勢がぼくに傾いてきた。」とはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なも
のを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア「ぼく」の頭が疲れてしまい、しだいに注意力がなくなってきたということ。

イ 勝負のなりゆきが、少しずつ「ぼく」に優位になってきたということ。

ウ わずかずつではあるが、「ぼく」が山沢君に追いつめられてきたということ。

エ「ぼく」を応援する人たちが、だんだんまわりに増えてきたということ。

問八 —— 線⑧ 「プロ五段の有賀先生から最高の贅辞ありがをもらった」とありますが、「贅辞」の意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア なくさめ イ はげまし ウ お説教 エ ほめことば

問九 —— 線⑨ 「山沢君が悔しやまざわそうに言って、ぼくの馬うまを動かした。」とありますが、なぜ「山沢君」は「悔しそう」なのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「ぼく」との対局が長引いたので、有賀先生と二面指しをする時間がなくなってしまったから。
イ もう少して自分が勝てそうだったのに、「ぼく」との対局が時間切れで終わってしまったから。
ウ 有賀先生に対局を止められたあとになって、こうすれば勝てたという方法が思いついたから。
エ 時間切れにならずにそのまま対局を続けていれば、いずれ自分が負けたらと思うたから。

問十 —— 線⑩ 「頭のなかで答えながら、ぼくはあらためてメガネをかけた小学2年生の実力に感心していい。」とありますが、なぜ「ぼく」は「感心していた」のですか。それを説明した次の文の 1・2 にあてはまる言葉を考えて答えなさい。

「ぼく」には、どうすれば「ぼく」が勝利できるのか 1 2 が、山沢君には

問十一 —— 線⑪ 「小学5年生のく応援おうえんしてください。」とありますが、有賀先生が「ぼく」と「ぼく」の両親に伝えたかったのはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「ぼく」はプロの棋士きしになったがっているが、小学5年生から始めたのではプロを目ざすにはおそすぎるので、親のほうからもあきらめるように言ってほしいということ。
イ 「ぼく」は小学5年生でアマチュア初段なので、小学2年生で二段の山沢君には勝てないと思っていたが、今日の対局を見ると山沢君と同じくらいの力があるということ。
ウ 「ぼく」は将棋しょうぎを始めた時期はおそいが、まだまだ上達する見込みがあるので、親としても、プロの棋士を目ざすことも視野に入れてはげましてあげてほしいということ。
エ 「ぼく」はプロを目ざせる才能があるので、すぐに親の手で弟子入りできるプロ棋士を探したほうがいい、そうでないと、プロになるチャンスを失ってしまうということ。

問十二 —— 線⑫ 「将棋界のことをなにも知らない父と母はキツネにつままれたような顔をしている。」とありますが、このとき「父と母」はどのような状態だったのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 思いやりのある言葉を言われて、すっかり安心しきっている。
- イ 息子を高く評価する言葉を言われて、手ばなしで喜んでいる。
- ウ とても信じられないことを言われて、ひどく腹を立てている。
- エ 思いもよらないことを言われて、理解が追いつかないでいる。

問十三 —— 線⑬ 「ぼくは初段になったばかりだから、三段になろうとしているきみをライバルっていうのは、おこがましいけど。」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「ぼく」より段が高い山沢君に対して、対等のライバルと呼ぶのを気がねする気持ち。
- イ 「ぼく」が山沢君よりも先に三段になってみせるぞと意気込む気持ち。
- ウ 三段の山沢君に対して、「ぼく」はすでに同等の実力があるという、自信に満ちた気持ち。
- エ 年上の「ぼく」に対して、生意気な態度を見せる山沢君に反発する気持ち。

問十四 —— 線⑭ 「ぼくの心はずんでいた。」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 負けてからというもの、ずっと勝ちたいと思っていた山沢君にとうとう勝つことができうれしくてたまらない気持ち。
- イ にくらしくてたまらなかつた山沢君が、小学2年生らしく負けてムキになっている姿を見られてゆかいな気持ち。
- ウ 勝ち負けを競う相手であっても、対戦を離れば一緒に高めあえるライバルであることに気づいて晴れやかな気持ち。
- エ 山沢君とのつぎの対局を想像し、楽しみな思いと、また勝てるだろうかという不安がいりまじって落ちつかない気持ち。

問十五 この物語の登場人物についての説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「ぼく」は、将棋しょうぎのことが大好きでまじめに取り組んでいるが、山沢君やまざわとの対戦後に「また指さう。」と話しかけていることからわかるように、勝ち負けにはあまりこだわらない、優しい性格やさである。

イ 「ぼく」の両親は、ふたりそろって将棋教室にやってきたことからわかるように、「ぼく」が将棋にのめりこんでいることを不安に思っており、できれば将棋をやめてほしいと思っている。

ウ 有賀先生ありがは、「ぼく」と山沢君との再戦を仕組んだことからわかるように、極めて用意周到きわな人物であり、自分の将棋教室からプロを育てあげることが最優先に考えている。

エ 山沢君は、「つぎの対局は負けないよ。絶対に勝ってやる。」と言っていることからわかるように、負けん気が強い性格だが、勝負に関しては言い訳をしないささぎよさもある。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 困っている人々をキユウサイする。
- ② 私の兄は学者のタマゴだ。
- ③ 私の祖父はヨウサン業を営んでいる。
- ④ 赤ケイトウの色が好きだ。
- ⑤ 身のチヂむ思いがする。

問二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 父の忠告に従う。
- ② 父は難しい顔で弟をよびつけた。
- ③ 枚挙にいとまがない。
- ④ 祖母を敬う態度をまなぶ。
- ⑤ 誠実な対応を心がける。

問三 次の①～④の各文の——線部の敬語について誤りがなければ解答らんじんに○を書き、誤りがあればその部分を正しく書き直しなさい。

- ① 先生は私にそのように申しました。
- ② お客様がわが家で夕食をいただく。
- ③ 私が先生の絵をご覧になる。
- ④ 来週、私が先生のもとに参ります。

問四 「あたかも」という言葉を使い、主語と述語のある一つの文を作りなさい。

問五 次の①～⑤の熟語の類義語を後のア～クの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 賛成
- ② 価格
- ③ 興味
- ④ 方法
- ⑤ 簡単

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 値段 | イ | 問題 | ウ | 準備 | エ | 関心 |
| オ | 手段 | カ | 容易 | キ | 感動 | ク | 同意 |